
追いかっこ

系

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追いかけてこ

【Nコード】

N7953W

【作者名】

糸

【あらすじ】

「と、いうわけで、そろそろうちのバカ皇子むすこを連れ戻してきてほしいのじゃ」「はあ」「どうした、元気が無いなあ。もうすぐラリナ嬢との婚礼だというのに」（この人：絶対嫌味だ）

長年想い続けてきた彼女とようやく心結ばれ、婚約することができた。あとは婚礼の儀の日を待つばかり。だというのに、生まれてから人に迷惑しかかかってこなかった乳兄弟のせいで、それさえも危うい状況に立たされた。こうなったらあの馬鹿放蕩皇子の首根っこをつかんできてやる…！と意気込む苦勞症の騎士の話。

00:プロローグ

その男は両腕に抱えきれないほどの花束と果物（実際、男の足元には色とりどりの花束が置いてあった）を持って、私の前に現れた。その男は、淡い茶色の髪と若葉のような瞳を持っていた。

「会いたかったよ、俺の花嫁」

開口一番、その男はにっこりと微笑みながら言った。

「は……花嫁えく？」

私はかろうじて、そう言うことが出来た。あまりにも突拍子のないことを言われ、脳が正常に働かなかったようだ。

「そうだよ。やっぱりきれいになったね。俺の思った通りだ」

男は手にしていた花束を私に突き出して（男にとっては差し出して）そう言った。

私はその花束には手を出さずに、男を睨みつけた。

「失礼ですが、何か勘違いしているのではないですか？ 私はあなたの事など一切知りません」

「やっぱり、俺のこと、覚えてないか……。無理もないかあ、出会ったのは十年前だもんなあ」

男は仕方がない、といったふうには首を振った。

「十年前……って、私が六歳の時じゃないですか！ そんな昔のこと、覚えていないはずがない」

思わず、丁寧な言葉遣いを忘れ、地が出てしまった。いいようのない怒りが、ふつふつと湧き上がってきた。

「まあ、一から愛を育むのもまた一興。なかなかいいかもしれない」「ちよつと！ 人の話を聞いているのっ!？」

本気で切れそうになったとき、私にとっての救いの神が現れた。

「どうした、シュリナ。大声を出して……」

「父さんっ！」

体格のいい五十歳ぐらいの男が私 シュリナに声をかけた。

「父さん、この人、どうにかしてほしいんだけど……」

「お久しぶりです、ジェンダ殿」

男はシュリナの父、ジェンダに向かってそう言った。

「はて、どちらさん……」

ジェンダはまじまじと男の顔を見た。

「お忘れでしょうか？ 十年前、こちらの道場でやっかいになった者ですが」

「十年前……。ああ！ あの時の！」

ぼん、と手を鳴らしジェンダは言った。

「たしか、ヴェクター・ヨムイエル、といったかな？」

「そうです！ 覚えていただけたんですね」

「ああ、よく覚えていられるとも。出来がよかったからな。久しぶりだな。また、稽古をつけてほしいのか？」

「いえ、今日は別の用件で参りました」

「ほう、して、それは何かね？」

「お嬢さんと、シュリナさんと結婚させてください」

怪しげな男 ヲェクターのその一言に、シュリナはもちろん、

ジェンダも止まった。

「……なっ！」

先に息を吹き返したのはシュリナだった。彼女は先ほども同じようなことを聞かされていたため、立ち直りがジェンダより早かった。

「さつきから！ 何を言っているの！？」

「本当は十年前に結婚したかったんだけどね、いかんせん、シュリナは六歳、俺は十五歳だったからな、法に違反していたからな」

しかたがなかったんだよ、と、ヴェクターはつぶやいた。

「……ヴェクター、本気か？」

ようやく立ち直ったジェンダがそう尋ねた。

「はい、本気です。決してお嬢さんを不幸にはさせません」

「こいつはわしの唯一の娘でな、わしの妻にそっくりなんだ。生半可な男にはやれん」

「大丈夫です、何事においても自信はあります」

「その言葉、うそ偽りはないと誓えるか？」

「誓えます」

ジェンダはヴェクターの瞳を正面から見据えた。ヴェクターは瞬きもせず、ジェンダの視線を受け止めていた。

「よからう」

ジェンダの口がようやく開いた。

「父さんっ」

その言葉に一番驚いたのはシュリナだった。

「しかし、こちらの条件を飲まなければならぬ」

「なんででしょうか？」

ヴェクターの顔は心なしか上気している。

「まず、シュリナを絶対に泣かせないこと、辛い思いをさせないこと、家事は二人で分けること、もちろん、育児もだ」

「任せてください。家事、育児は得意です」

胸を張ってヴェクターは答えた。

「そしてっ！ この条件を満たさなければ、結婚は認めん」

「それは？」

「この道場にいる者全てに勝てなければならぬ。それぐらいの力量が無いやつに、シュリナを守らせることはできない」

「父さん！」

シュリナは喜んだ。道場にはジェンダの弟子だけでゆうに三十人はいる。それに、彼女の兄もいる。もちろん、父もだ。

「わかりました。その条件を飲めば、お嬢さんとの結婚を認めてくださるのですね？」

「ああ」

ヴェクターはくるりとシュリナのほうに向き直っていった。

「じゃあ、がんばってくるよ」

満面の笑顔でヴェクターは言い、そして先に進むジェンダの後をついていった。

シュリナは残された花束と果物を見ながら、つぶやいた。

「無理に決まっているのに…」

それから、花束を道場と家中の花瓶に挿して回った。

こうして、シュリナの運命をかけた戦いが始まった…。

00:プロローグ(後書き)

(811100992)

朝から嫌な予感はしていた。

「よう、先代様がお前を呼んでいらしたとさ」

同僚のマクエスが俺の肩を叩きながらそう言った。

「あの方が？ ……今日は城に来ていないとっておいてくれ」

「そうはいかないさ。なんせ、先代様はお前が登城したらすぐにさせるように、門番に伝えていらしたからな。お前が来ていることはすでにご承知だ」

にひひ、と笑いながらマクエスは言った。

「……最悪だ。あの方に呼ばれるときはろくなことが無い」

「しかたが無いさ、なんせお前は皇子様の親友だからな」

「親友なものかつ！ あいつは…あいつは人に迷惑をかけることをお楽しみとしているヤツだつ！ 小さいときから俺を悪の道に引きずり込んで置いてきぼりにしてきた、史上最悪のヤツだ！」

「王族と乳兄弟とは、本来なら名誉なことだが、お前に限っては同情するよ」

ほろほろと泣く真似をするマクエスに、俺 ティンクスは白い目を向けた。

「お前：面白がっているだろう？」

「あ、バレた？ だつてお前、今幸せの絶頂期だろう？ 俺としては少しは不幸になってほしいからな」

「ああ、幸せの真つ最中だ。やっと、三年越しの片思いが通じたのだからな」

ティンクス・アザル・フォレスティア、二十四歳。フォレスティア侯爵家の次男であり、王宮第五騎士団団長である。彼は第三皇子であるヴァジエスタ・サモイストの乳兄弟であり、親友（ティンクスの言葉では腐れ縁）である。今年の春、三年越しの片思いの相手

であるティティーズ伯爵家の長女、ラリナ・スルト・ティティーズとの婚約が決まり、婚礼を後ひと月と待つ身である。

「だからその幸せの力で、さっさと用件を片付けてこいよ」

「無理だ…。あの方からの命令で、あいつがらみの用件が、ひと月で終わるはずが無い。これは悪質な嫌がらせだ」

「まあまあ、とりあえず、用件を聞きに行けよ。これ以上待たすと、お前の家に押しかけるぞ、先代様は」

「……笑えない冗談、ありがとう」

「まあ、幸運を祈るよ」

マクエスの励ましを背に、ティンクスは先代が待つ謁見の間へと重い足取りで向かった。

01(後書)

(8119002)

「と、いうわけで、そろそろうちのバカ皇子むかしを連れ戻してきてほしいのじゃ」

「はあ」

なんとも生気の無い声で、ティンクスは返事をした。

「どうした、元気が無いなあ。もうすぐラリナ嬢との婚礼だということに」

（この人…絶対嫌味だ）

ふつふつと湧き出る怒りを何とか押さえ込み、ティンクスは言った。

「そうですね、あなたの愚息が余計なことさえしなければ、ですけどね」

「まったく、あいつもきつとそなたに探してもらいたがっているだろう。まったく、いくつになってもヴァジエスタはそなたのことが好きだからなあ」

いけしゃあしゃあと、先代　オルコットは言った。

（やはり、この人への嫌味は焼け石に水だ。まったく効かない）

内心で大きなため息をついて、これ以上ここに留まるのは時間の無駄だと判断したティンクスは敬礼した。

「わたくし、ティンクス・アザル・フォレスティアは騎士の名誉にかけて、ヴァジエスタ・サモイスト皇子を城に連れ戻すことを誓います」

「うむ、そなたにまかした」

失礼します、と一礼をしてから、ティンクスは謁見の間から退出した。

残ったオルコットに、妃であるレイナが声をかけてきた。

「かわいいそうに…。あなた、わざとですね？　ティンクスにあの子

を連れ戻すよう命を出したのは……」

「そろそろあの放蕩息子にも国政の一端を任せたいからの。ティンクスは以前、あやつを連れ戻した経歴がある。それを買ったまでだ」
「まあ、では、彼の婚礼は？」

優雅に微笑みながら、アレイナは夫に尋ねた。

「もちろん、心から祝っておる。あいつの片思いは有名だったからなあ。死に物狂いで、ヴァジエスタを探し出してくるだろう」

「まあ、悪い方ね」

「止めないお前も同罪だぞ？」

「あら、私は一応、忠告はいたしましたわ」

「そうだったかな？」

二人はくすくす笑いながら、さて、ティンクスは何日で息子を連れ戻してくるか、賭けをし始めた。

「まあ、先代様からそのような命を……」

しつとりと濡れた青緑の瞳を丸くしながら、ラリナ・スルト・テイーズはひと月後には夫となるティンクスを見た。

「ええ、あなたには申し訳ないことですが、俺はこの命を遂行しなければならぬ。……ことによると、ひと月後の婚礼には、間に合わないかもしれない……」

「それは……仕方無いことですね。先代様直々の命ですもの。あなたは騎士として、その命を全うする義務がおりなのですよ」

「すみません……。なるべく早く、皇子を探し出して、首根っこを捕まえて戻ってきます」

「まあ」

くすくすとラリナは笑った。

「待っていてください」

「ええ」

ティンクスはラリナの額に軽く口付けして、部屋を出ていった。

ラリナは窓際へ寄り、屋敷から出て行くティンクスの姿を見つめていた。

「しかたがないですわ……。ティンクス様は騎士でいらっしゃる。女の私にはなにも手伝うことはできない……」

きゅつと唇を噛みしめて、ラリナは窓際から離れた。

(8119002)

02(後書)

「開門っ！」

ギギギ…と、重い音をたてながら、三の郭の門が開いた。そこから一歩足を踏み出せば、そこはもう城下町だ。

ティンクスは身軽な旅支度の格好で愛馬を歩かせた。家の者には明日出立するよう言われたが、彼は今すぐにでも出かけるつもりだった。

「一日でも早く、やつを見つけ出して、そしてラリナ殿のもとへ戻るんだ」

ティンクスの胸にはただその想いだけがあった。

町の中で馬を走らすことができるのは緊急時だけである。ティンクスは競歩の速さで馬を歩かせた。

町は活気付いている。国の中心地であるこの町は、商売と職人の町である。それぞれの職人達が貴族の娘達が喜ぶ装飾品や、騎士が大事にしている剣などを作っては、商人がそれらを売る。こうしてこの町は成り立っている。

(あの髪留め……ラリナ殿に似合いそうだな)

ふと、目に留めた髪留めにティンクスは愛しの婚約者を思い出した。しかし、すぐに彼女のことを頭から追い出した。

(だめだ。まだ城から出たばかりだというのに、彼女のことを思い出している……)

そうしなければ、きっとティンクスは四六時中、ラリナのことしか考えていないだろう。

一刻も早く、ティンクスは町から出ることにした。

(たしかこの間のあいつ探しの時は、クルドリネの町で見つけたんだっただな…)

過去の記憶を思い返し、ティンクスは、最初の目的地をそこと決めた。

町を出るとそこには田園風景が広がっている。そのほとんどが小麦を栽培している。農夫達が額に汗水流して働いている。

「……のどかなあ」

しばらくその風景を見ていたティンクスだが、やがて馬を走らした。

彼にはやることがある。

しかも、時間が迫っている（彼の気分では）。

「がんばろうか、ライよ」

愛馬の名前を呼んで、彼は手綱を強く握り締めた。

(811900112)

03(後書)

ばちばちと、焚き火の火が燃えている。そのすぐそばに座って、テインクスは考え事をしていた。

その日のうちに、隣町であるクルドリネの町には着いた。しかし、ヴァジエスタらしき人物は、ここ数ヶ月、見た覚えはない、というのが大方の町人達の証言だった。

「くそつ、これは国中探し回る覚悟でない」と……

クルドリネの町の宿に泊まらずに、彼は先を急いだ。日が落ちたので野宿となったのだ。ここからクルドリネに戻るには、離れすぎている。

「日が昇ったら、このままマーサの村に行つて、そこにいなかったら、ダズナの町に行くか」

はあ、と大きなため息をついて、手にしていた地図をおろした。焚き火の火だけでは、地図を見るのはつらかった。

寢床の用意をして火に木の枝をくべようとした時、背後で音がした。

反射的に置いてあつた剣をつかみ、切っ先を物音へと向けた。

「何者だっ!？」

相手が人が獣か分からなかったが、とりあえず、テインクスは怒鳴った。

「……人？」

少女のような声が聞こえた。

すると、茂みから、一つの影が現れた。

「……!」

剣を振るつたが、寸前で動きを止めた。

現れたのは十三になるかならないかの少年だったからだ。

「よかった、明かりが見えたから誰かいるんだと思つて……」

声変わりもしていないその少年は、安堵の顔をした。

「おい、坊主、こんなところで何をしている？」

「ぼ……」

何かを言いかけたが、少年は言葉を呑んだ。そして、ティンクスの目を見据えて答えた。

「僕は……しつこいやつから逃げてきたんだ」

「しつこいやつ？」

「ああ、とつてもしつこいやつ」

よくよく見てみると、少年は少女ともいえる整った顔立ちをしている。髪の色は太陽の光を紡いだような金。そして、瞳は珍しい紅の色彩。

（なるほど。…人買いが狙いそうな上玉ってわけだな）

貧しい農村では娘や息子を人買いに売る親がいると聞く。少年もそうようだ、とティンクスは思った。

「それならば、クルドリネの町に行って役所に言うがいい。保護してくれるさ」

「役人は何もできないよ。あんなやつ、止めることなどできないさ」
少年は肩をすくめながらそう言った。

「しかし……」

「僕は一生逃げ回るさ。そうだな、アキドレの村でも行って、暮らそうかなって思ってる」

「アキドレって……ここからお前のような子供の足だと半年はかかるぞ？」

「それでも、僕はがんばるさ」

ティンクスはため息をついた。何を言っても無駄のようだ。少年の瞳には固い決心が宿っている。

騎士である自分は、本来なら早急にクルドリネの町にこの少年を連れて行って、役所に預けるのが一番である。しかし、騎士でありながら、彼はそうしようとは思わなかった。少年は絶対に役所には行かないし、そしてなにより、ティンクスは時間を惜しんだ。

(そのうち、アキドレへも寄るかもしれないしな)

「坊主、俺と一緒に旅するか？」

「えっ？」

「俺は理由^{わけ}あってこれから色々な町や村に寄るつもりだ。おそろくアキドレにも行くだろう。そこまで連れてってやる。どうだ、くるか？」

「でも……」

「本当はな、お前を今すぐにも役所に出したいよ。しかし、俺には時間がない。お前一人、このライに乗せたって、そう変わりはしない」

「……いいの？」

「ああ、そのかわり、揉め事は起こすなよ。余計な時間はとりたいくないんだ」

「うん！ ありがとう」

「よし、俺はティンクスだ。お前は？」

「僕はシュ…シュツダ、シュツダだ」

「もし、途中でその、しっこいやつが現れたら、俺に言えよな。とつつかまえてやる」

「あはは、ティンクスは…お兄さんに捕まえられるかな？」

「ティンクスでいい。捕まえられるさ。俺はこう見えても強いからな」

「じゃあ、頼りにさせてもらいます」

「まあ、今晚はさっさと寝ろ。明日は早いからな」

「はい」

ティンクスは自分のマントをシュツダに貸した。シュツダはティンクスのマントと、自分のそれと枯葉で、上手に寢床を作った。

こうして、奇妙な縁で知り合った二人は、そうそうに眠りに付いた。

(8111009112)

04(後書き)

二人連れの旅になったが、実際、シュツダは足手まといどころか野宿が多いこの旅では非常に役に立っていた。まず、獲物を見つけてるのがうまい。そして、捕らえるのも非常にうまい。さらに料理の腕は最高である。固いパンと干し肉の食事が当たり前だった以前の旅とは違い、シュツダが獲ったウサギの肉をあぶり、塩を振り掛けるという温かい食事や、食べられる薬草やきのこ類などを採ってきでは、井戸が近くにある場合に限って、スープを作ったりする。まず、食の面において、シュツダは花丸の働きをしている。そして、彼はその細い外見に惑われやすいが、武術をたしなんでいるようだ。以前、熊に遭遇したとき、ティンクスの剣よりも早くシュツダのとび蹴りが効いた。武術は得意だという。ティンクスは目を見張るおもいだった。

こうして、旅は順調に進んで行った。マーサの村もダズナの町も、皇子と見られる人物はいなかった。

「まったく…本当にどこにいるのやら」

「ティンクスが探している人物って、度々行方不明になるんだ」

久しぶりの寝台の感触を確かめてから、シュツダは尋ねた。

「ああ、以前にもふらりと姿を消したことがあるのだが、一年ぐらい経ってからかな、俺が見つけた」

「へえ、すごい」

「しかし、一年探してようやく見つけたんだぞ？　今回はなんとしても、あと二十日のうちに見つけ出したいんだが…」

「何かあるの？」

「……」

ティンクスはその問いには答えなかった。子供相手にまさか、婚礼が二十日後にあるから、とは言いにくかったのだ。

「ああ、なにか大事な用があるんだね。一族が集まらなければいけ

ないとか、誰かの結婚式とか…」

何気ないシュツダの一言だったが、ティンクスは十分に驚いた。時々、シュツダの勘の良さには舌を巻くおもいである。

ティンクスの動揺には気づかず、シュツダはおもいきり伸びをした。その間にティンクスは心を鎮めて言った。

「飯でも食いに行くか？」

「うん」

二人は部屋を出て行って、食堂へと向かった。

一緒に旅をし始めて十日ほどだったが、二人は互いに詳しい身の上を話し合っていない。お互い、なんとなく話題からそらしている。

シュツダの作る料理もおいしいが、なんといっても材料の量が違うので、やはり宿の料理はおいしかった。鶏を丸々一羽、腹に香草を詰め込んで焼いたものと、コーンスープ、焼きたてのパンはあつという間に二人の胃袋に納まった。

「ところで、次は港町、ディパーンに行くんだよね？」

「ああ、あそこは人の出入りが激しいからな、手がかりがあるとは思えないが、まあ念のためにな」

久しぶりに飲む酒とつまみに舌鼓を打ちながら、ティンクスは答えた。

「ふーん、僕、海って見たことがないなあ」

「へえ、じゃあ、明日初見ってことか？」

「うん」

「そうか、時間があれば、船にも乗せてやりたいが…」

「そんなんっ！ ただでさえ、お金、出してもらっているのに、これ以上出してもらったら悪いよ」

あわててシュツダは手を振った。

「まあ、この金は俺のじゃないからな。節約は必要だが、ちょっと精神的傷害分として、多めに使わせてもらっているのさ」

片目を瞑りながら、ティンクスは言った。

その言い方に、シュツダは思わずふきだした。

「あははは。可愛いそう、その人！」

「可愛いそうなのは俺のほうさ。婚礼ひと月前に人探ししろと命じられたんだから……」

しまった、とティンクスは思ったが、もう後の祭り。ばつちり急いでいる理由がばれてしまった。

「……それで、一生懸命だったんだ」

シュツダはなるほど、と深く頷いた。

「……そうなんだ」

酒のせいだけでなく、顔を赤くしたティンクスは言った。

「じゃあさ、もっと急がないと。可愛いそうだよ、お嫁さんが。相手に待たされるのって」

そこまで言っつて、シュツダは唐突に黙り込んだ。

「……どうした？」

ティンクスはシュツダの顔を覗き込んだ。

「うん？ ベつに」

シュツダは立ち上がり、言った。

「先に風呂に入って寝てるね。ほどほどにしなよ？ かわいい花嫁さんが、首を長くして待っているんだから」

にんまり笑いながら、シュツダは歩いていった。

一人残されたティンクスは、手にしていた杯を置いて、つまみを一口、口に入れた。

「……子供に説教されるとは……」

面白がるように、ティンクスは微かに笑った。

05(後書)

20110924)

前。
ティンクスが恥ずかしい告白をしてしまった夜から遡ること五日

「お嬢様、最近元気があまりないご様子ね……」

「そりゃ、ティンクス様が先代様の命を受けて、留守になさっているからよ。婚礼は二十日とちょっとしかないから……」

「そういえば、お館様、婚礼を先延ばしにするようお嬢様におっしゃったとか……」

「そうそう、けれど、お嬢様はうんとはおっしゃらなかったみたいよ。だから、お館様はフォレスティア公爵様にそれとなく延期の話をなされたご様子で」

「まあ、それだとますます元気が無くなってしまっわね」

「そうね……」

二人の女中はそんなことを話しながら、廊下を歩いていった。

二人の姿が消えると、一人の人物の姿が現れた。

その人物は軽いため息をついて、足早にこの家の姫である、ラリナの部屋へと向かった。

ノックの音に、ラリナはゆっくりとドアのほうへ振り向いた。

「どうぞ」

「失礼します」

礼儀正しく入ってきたのは、ティティーズ家の女中で、ラリナの乳母の娘であり、そして、ラリナの一番心を許しているネルだった。

「あら、ネル」

「お嬢様……」

ネルはラリナの顔を見てひどく落胆した。顔が青白い。ティンクスとの婚約が決まったときは、あの頬をばら色に染めていただけに、

その差はひどくネルに心配をさせさせた。

「お嬢様、あまり夜、寝ていらつしやらないのですね」

「ええ……。つつい、夜空を見てしまうの……。ティンクス様もこの空をどこかで見ていらつしやるのではないかと……」

「大丈夫です。ティンクス様はきつとすぐ戻られますよ。あと二十五日もあるんですよ？ 必ず、間に合います」

「私もそう思っているのだけれども……。私も何か手伝えることがあれば、今すぐにも手伝うのに……」

そういつてラリナは、結び上げもしていない長い黒髪をいじった。
(ああ、本当にお嬢様はつらいのね……)

そのしぐさを見て、ネルはしみじみそう思った。小さい頃から一緒に育ってきたネルにとつて、ラリナはすばらしい姉であり、主人であり、そして友人であった。彼女はしかられたり、痛かったりすると、無意識に指で自分の髪をいじる癖がある。そのことを知っているのはネル以外、誰もいない。

ネルは大好きなラリナをティンクスにとられる思いがして、最初は婚約を快く思っていなかった。けれど、ティンクスは申し分ない男性で、そしてラリナを心から大事にしていることが分かると、すぐにその考えは消え去った。そしてなにより、ラリナ自身がこの婚約を、一番喜んでいたのである。

ネルは知っていた。ラリナは、決して口では言わなかったが、実はティンクスのことが好きだったということ。

だからネルは、誰よりも二人の婚約を祝っていた。

ネルはしばらく何も言わなかった。しかし、覚悟が決まったのか、ゆっくりと顔を上げて口を開いた。

「……お嬢様、ティンクス様を助けたいと思っていますのですね？」

「ええ、今すぐにでも」

思っていたより、しっかりとした声で返事が返ってきた。

「ならば、ティンクス様を追いかけませんか？」

「追いかける？」

「はい。一緒に、ヴァジエスタ皇子を探しませんか？」
ティンクス様と……。

「ラリナはネルの瞳をゆっくりと見た。」

「……お父様が許してくださいさらないわ」

「そうです。だから、こっそり屋敷を抜け出すのです」

「あなたがすごく叱られるわ」

「それぐらい、大丈夫です。ここを辞めさせられることになっても、
職はたくさんあります」

「どん、と胸を叩いてネルは言った。」

「……でも、今から追いつくことが出来るかしら？」

「実は……わたし、ティンクス様から道筋を伺っておきました」

「本当？」

「はい。もしかしたら、こういう事態が起こるかもしれない、って
考えていたんです」

「ネル……！」

「ラリナはネルに抱きついた。」

「お、お嬢様っ」

「やはり、ネルは賢いわね。私の最高の妹で、友人よ！」

「ネルはラリナ自身からそんな言葉を聞くことが出来て赤面した。」

「そ、そんな……お嬢様」

「そうと決まれば、今すぐにも出発しましょう！」

「ま、まっってください。用意とか、色々しなければいけないことが
あるでしょう？」

「大丈夫、ほら」

「そういつてラリナは大きな自分の寝台の下から、小さめのかばん
を二つ、取り出した。」

「何かあるかもしれないって、こっそり準備していたの」

「にっこりと微笑みながら言うラリナに、ネルは啞然とした。」

「どちらかといえばおっとりとしたラリナが、こつも行動的になる
とは……。」

(恋ってすごい……)
ネルはそう思った。

06 (後書)

(20111003)

「さあつて、着いたぞ」

馬から下りて、ティンクスは言った。

「わあ〜！ 人がいっぱい！！」

シュツダは頬を上気させながら言った。

「ここはこの国一番の港町だからな。他国からの物質や情報が集まってくるんだ」

ティンクスはライの手綱を持ち、シュツダと並んで歩き出した。

港町ディパーン。様々な物資と人との交流が盛んである。もしかすると、王都ロクエムを越す賑わいがあるといわれている町だ。

「あれが海っ！」

シュツダは太陽の光で輝く海を指差しながら叫んだ。

「そうだ。そして波止場に止まっているのが船だ。あれに色々な荷物や人が乗って、海に向こうからやってくるんだ」

「へえ、すごいねえ」

初めて見る海に興奮しながら、シュツダは答えた。

「内陸からこつちに向かってきたからな。この町に来てようやく本物の海が見れたな」

「うん、うれしいな。僕、知らないことを知るのが好きなんだ」

「へえ、シュツダは勉強家だな」

青い目を細めて、ティンクスは言った。

「まあね、知識を取り込むのが好きなんだ」

それからシュツダは荷揚げされてくる荷物をさして、あれはなんだ、それはなんだ、と、矢継ぎ早にティンクスに質問した。ティンクスも自分の知識を広げて、シュツダにひとつひとつ説明してやった。

「とりあえず、ここで宿を取るか」

「そうだね。これだけ大きな町だもの。一日で情報を集めるのは大変だね」

「その通りだ」

二人は酒場と宿が一緒になっていいる宿場へと向かった。とりあえず、二日分の金額を払い、大きな荷物を部屋に、馬を小屋に預けて、二人は広場へと向かった。

広場へと続く道にはで店が並んでおり、人通りも多く、活気があった。

「あの果物、なんていうのだろう」

「ああ、あれはコチの実といって、南国の果物さ。濃厚な甘味で、若い女性に大人気なんだ」

「へえ、ティンクスの婚約者さんも好物なの？」

意地悪く、シュツダは聞いた。

「ああ、そうだな」

微かに赤くなりながら、ティンクスは答えた。その表情に満足したのか、シュツダは笑いをこらえながら別の果物をさしてはティンクスに尋ねた。

二人はこの町で一番大きな広場へとやってきた。

「さすがに……人の数だけはやたらと多いな」

「うん」

このなかからたった一人の情報を得ることなどが出来るのだろうか？

はなから半ば諦めているティンクスだが、彼はとりあえず、いろいろな人に尋ねた。シュツダも手伝いとして銀の髪に緑の瞳の、二十歳ぐらいの男を見かけたことはないか、尋ねまわった。

「ふー、こんな珍しい組み合わせの男、なかなかいるわけがないから、印象には残るはずなんだがなあ……」

すでに三十人以上は同じ質問を繰り返していたティンクスは、少し疲れて広場の中心にある噴水の縁に座った。

「なにしゃがるんだっ！ このガキっ！」

ティンクスは声のした方向に、すばやく視線を移らした。見るとある一角で、体格のいい水夫と思わしき中年の男が、子供二人に怒鳴りつけている。

「あ……」

あわてて、ティンクスはそちらへと駆け出した。二人の子供のうち一人は、ほかならぬシュツダその人だったからだ。

「てめえには関係ないだろう、おとなしくそのガキをこっちにわたしな」

「いやだね。この子はおびえているじゃないか。それにあんた、いきなりこの子を殴ったじゃないか！」

「このガキがいきなりぶつかってきて、おれの相棒にけがさせやがったんだ」

隣にいるもう一人の男はひざを抱えている。

「骨を折ったかもしれない。おれたちは身体が商売道具だ。その損害分を払えといったら、払えねえとしいやがる。ふざけたことをめかしやがるから、ちよつと殴ったまでだ」

「ちよつとだと!?! この子の顔を見ても！ こんなにも腫れているじゃないかっ！」

「しるかっ！ そいつがちびっこいのが悪いんだ」

「そのちびっこいやつにぶつかられたぐらいで骨を折るとは、なまっちよるい身体なんだな」

ふんっ、とシュツダは笑った。

「なんだとっ!?!」

「どっちみち、もう水夫は無理だったんじゃないの？」

「いわせておけばこのくそガキがあ……!」

顔を真っ赤にして男はシュツダに殴りかかった。

周りで事の成り行きを見ていた大人達は小さな悲鳴を上げる。

「ちよつとまで、子供相手に乱暴はよせ」

男の拳がシュツダにたどり着く前に、ティンクスはその腕を止めた。

「なにしゃがる！」

「いい大人が情けない。子供を痛めつけて何が楽しい」

「うるせえっ！ てめえには関係ないだろ！ すっこんでろっ！！」

「その少年は俺の連れだ」

二人の男は顔を見合わせた。

「……どっちがお前の連れだ？」

「威勢のいいほうだ」

「なら関係ねえ。おれたちが用があるのはそっちのガキだ。そいつを連れてどっかにいけ」

そういつて、男はティンクスの身体を見た。

「それともなにか、てめえがそっちのガキまで責任取ってくれるのか？ 薄汚れたなりにはなっているが、来ているものは上等じゃねえか。なあに、こっちは治療費分の金さえ払ってくればいいからさ」

男の提案に、ティンクスは鼻で笑った。

「怪我しているって？」

そういつてティンクスは座り込んだままの男へと近寄っていった。

「……これのどこが怪我している？」

ティンクスは座り込んでいる男を無理やり立たせ、抱えていなかったほうの足のすねを思いっきり蹴った。

「っ……！！」

あまりの痛さに、男は蹴られたほうの足を抱え、ぴよんぴよん飛び回った。

「ほら、ちゃんと骨はつながっているじゃないか」

周りからわあっと歓声上がる。

分が悪いと思った男達は悪態をつきながらもその場から離れていった。

「シュツダ、たのむから、あまり揉め事は起こさないでくれよ」

「あいつらが悪いんだ。この子をいきなり殴りつけるから」
そういつてシュツダはあまりの痛みのせいで涙も出ていない少年の髪をそつとなでた。

「あいつら、わざとこの子がぶつかるといって歩いていったんだ。それでこの子から金を取るうとしていたんだよ」

「……………」
ティンクスは懐に入れてあつた布を取り出し、水筒の水に浸して少年のはれ上がった頬に当てた。

「っ……………！」
触れられて痛かったのか、少年は小さい声をもらした。

「大丈夫か？」
ティンクスに優しく聞かれて、少年はその大きな瞳からぼろぼろと涙をこぼした。

「怖かったよね、痛かったよね、泣きたかったよね。もう大丈夫。悪いやつらは行ってしまったから……………」

シュツダが優しく抱きしめてあげると、少年はすがって泣き始めた。

「あんたら、たいしたもんだよ」
それまで、事の成り行きを見ていた一人の大人が、二人に声をかけてきた。

「その小さな身体で大の大人二人にも物怖じしないとは」

「あんたもすごいな。ほそつこいのに、あいつの拳を止めるとは」
次々に賞賛の声が上がった。

そんな大人たちを見て、シュツダは静かに言った。

「あなた達、大人でしょ？ 見ていたでしょ？ それなのに、この子を助けることもしないし、あいつらを諫めることもしなかった。それが大人のすること！？」

「えっ……………、それは……………」

シュツダみたいな少年に非難されて、大人達は視線をずらした。
「争いごとにかかわりたくないのは分かるけど、目の前で困ってい

る人がいたら助けてやるのが、人の道じゃないの！」

紅い目をすつと細めて言うシュツダには、えもいわれぬ迫力があつた。

「シュツダ……」

テインクスはシュツダの剣幕にうるたえている少年を抱き上げ、シュツダも立たせた。

「さあ、もう行こう。この子に手当てをしてやらないと」

テインクスの言葉に小さくうなずいて、シュツダは歩き出した。周りを囲っていた人たちが道をあける。

「……ここは港町で交易も規模が大きい。様々な国の人があつてくる。諍いも当たり前の事かもしれない。しかし、小さな子供を守ってやるのが、年長者としての責任だと思うよ」

テインクスは振り返って、最後にそう言った。誰もが気まずそうに顔をうつむけている様をみて、テインクスは歩き出した。そして、後ろは振り向かなかった。

07 (後書き)

20111000
(4)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7953w/>

追いかけて

2011年10月5日03時13分発行